

## Ⅱ. 植 生 概 観

浜岡地区および周辺 30km 圏は、本州のほぼ中央部で太平洋に面し、温暖な気候条件下にある。したがってほぼ全域が、ヤブツバキクラスにまとめられる常緑広葉樹林を原(始)植生あるいは潜在自然植生とする地域、すなわちヤブツバキクラス域 *Camellietea japonicae*-Gebiet にふくめられる。かつては、小笠郡浜岡町の桜ヶ池や賀茂神社に現在でも見ることができるシイ、タブ、カン類を中心とする常緑広葉樹の高木の自然林に被われていた。しかし、有史以来の人間活動の影響は大きく、うっそうと茂っていた原(始)植生は次々と破壊され、社寺林として積極的に保護されてきた地点を除くと、人為的干渉下に成立する二次植生、植林などに置きかわっている。浜岡地区および周辺域の植生的特徴としては、沖積面と台地との接点域に点在する社寺林に自然植生あるいはそれに準じる自然度の高い林分としてスダジイ林、タブノキ林が多く残存している点と、遠州灘に面した砂丘に、コウボウムギ、ハマグルマ、ケカモノハシなど砂丘特有の植生が不連続ながらみられる点をあげることができる。砂丘地帯では、内陸側の農地や人家を海から守るために、人工的に砂丘が形成されており、アカマツ、クロマツ、ウバメガシ、トベラなどが連続した樹林景観を形成させている。

代償植生として浜岡地区および周辺域で最も特徴的な植生は常緑広葉樹の二次萌芽林である。牧ノ原台地から南に派生した丘陵斜面に広い面積を占めており、特有な景観を形成している。この常緑二次低木林は高木林としても存在するウバメガシ―スダジイ群落、ヤマモモ―スダジイ群落などにまとめられ、コナラを中心とする夏緑広葉樹の二次林は島田市千葉山、掛川市栗ヶ岳などを中心とする地域に広がっている。植林では、クロマツ植林が主に浜岡砂丘の砂丘列上を中心に、分布しており沿海部の丘陵地の一部にも広く見られる。アカマツの植林地はやや内陸にあたる牧ノ原台地付近の丘陵部、尾根状地に多い。また、スギ、ヒノキの植林地は、台地斜面の谷状地や、沖積低地と接した水分条件に恵まれた立地に広く分布するが、林分の広がりには狭い。現存林分の多くは線状あるいは帯状に見られるにすぎない。またニセアカシアやオオバヤシャブシの植林が小面積ながら砂丘地帯に点在している。マダケやモウソウチクの植栽地も集落の中やまわりに小面積ながら分布している。

大井川、新野川、菊川、太田川などの形成する沖積低地では広く水田耕作が行なわれている。遠州灘に面した砂丘地帯では、小砂丘間の平地には、スイカ、ラッカセイ、ニンジンなどの栽培を中心とする畑耕作地が広がっており、コミカンソウ―ウリクサ群集で代表される雑草群落が見られる。

一方、台地上は牧ノ原台地の延長にあたり広く茶畑に利用されている。とくに平坦部の大きい浜岡町北部の朝比奈原付近には広大な面積の茶畑が見られる。